

令和 6 年 5 月 23 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2023

課題番号：16K20816

研究課題名（和文）生体臓器移植レシピエント・ドナーのアドヒアランスに関する研究

研究課題名（英文）Study on Adherence of Recipients and Donors in Organ Transplantation

研究代表者

田村 裕子 (Tamura, Yuko)

三重大学・医学系研究科・助教

研究者番号：30746722

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：腎不全の患者の生活の質（QOL）を改善する有益な治療法として腎移植が行われるが、腎移植後のレシピエントの気分とQOLの関係は明らかではない。そのため、腎移植後患者を対象にQOL調査(SF-36v2)を行い血液透析患者の結果と比較した。また、QOLに関連する要因を特定するため、気分（POMS）等の独立変数を用い回帰分析を行った。移植群のQOLは血液透析群と比較して有意に高かった。QOLに関連する要因の中で、身体的QOLには「年齢」と「混乱」、精神的QOLには「活力」と「疲労」が関連していた。腎移植後レシピエントのQOLを維持し向上させるためには、特に「混乱」や「疲労」に注意することが重要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

移植後のレシピエントには心身両面の要因から頻繁に精神症状が出現する。特に移植後初期のうつ病・うつ状態は長期予後に悪影響を及ぼす。更に、移植後のノンアドヒアランスは、拒絶反応や移植臓器の機能廃絶を招くことが知られている。移植臓器が廃絶すれば、患者やその家族だけでなく、社会全体にとっても大きな損失である。そのためレシピエント・ドナー共に術前から術後にかけての継続的な評価が必要であり、研究対象者は、性格特性や心理状態に合った効果的な指導を受けられ、移植臓器の長期生着が可能になる。医療者も、アドヒアランスに影響する因子を明らかにすることで、術前から術後の対応を予測した医療が可能となる意義がある。

研究成果の概要（英文）：Methods. Sixty-eight post-kidney transplantation patients. The QOL of the participants as measured by SF-36v2 questionnaire. Moreover, a multiple regression analysis was performed, including some physical, mental, and socioeconomic characteristics independent variables.

Results. The QOL of the transplantation group was significantly higher for all 8 subscales of SF-36v2 compared with the hemodialysis group. Among the factors, greater age and higher “confusion” levels were related to lower physical QOL. In addition, higher “vigor” and lower “fatigue” levels were related to higher mental QOL, while the condition of having an occupation was related to higher role/social QOL.

Conclusion. The QOL of recipients after kidney transplantation was better than that of hemodialysis patients. It is important to pay attention to mood status, especially to confusion and fatigue, in order to maintain and improve the QOL of the recipient after kidney transplantation.

研究分野：看護学専攻

キーワード：臓器移植 精神状態 Quality of Life

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究の学術的背景

移植患者は移植前には重症臓器不全患者としてさまざまな心理社会的なストレスにさらされる。移植後には拒絶反応、移植臓器不全の出現は著しい心理的ストレスとなる。ほかに、ドナー選択を含む家族関係の問題などのストレスに対処する性格特性や対処スタイルなどが精神障害の発症に影響する心理社会的要因として報告されてきた(春木,2004)(堀川,他,2006)。そのため、移植前後にかけて継続的に精神的評価を行いリスクを軽減することが患者の良好な治療経過につながる可能性が高い。

三重大学医学部附属病院で行われている生体臓器移植は肝臓移植、腎臓移植である。日本における肝臓移植、腎臓移植の治療成績は良くなっているものの、この背景には移植臓器を保持するための患者側、医療者側の努力が必要であり、移植臓器の長期生着のためにはアドヒアランスが重要な要素である。先行研究でもアドヒアランス不良は予後へのインパクトが大きいことは報告されており(Fine RN, et al,2009) FIGURE1 (Mirjam Tielen, et al.,2014)からもアドヒアランス不良が移植臓器の長期生着に大きく関わることは明らかである。術後の合併症回避および移植臓器が長期生着するためには、服薬アドヒアランスの維持、適正体重の維持や塩分摂取量の制限などの生活改善が必要である。これらを実行できるかどうかの評価として、レシピエント・ドナーの性格傾向や移植に伴う心理状態、QOLを生体臓器移植前から術後にかけて継続的に調査し、その変化を明らかにすることは移植臓器の長期生着を実現するために有用であると思われる。先行研究においても術前の心理評価の重要性(Dobbels Fabienne,et al.,2009)や、QOL調査については国内外で多数の報告がある(Kousoulas L,et al., 2011)(Ishizaki M,et al., 2012)(林,他,2001)。しかし、レシピエント・ドナー両者の性格傾向、心理状態とQOLとの関係を移植前から移植後にかけて長期間で評価しているような先行文献はみあたらなかった。そこで我々はこれらの項目を包括的かつ継続的に評価することを計画した。

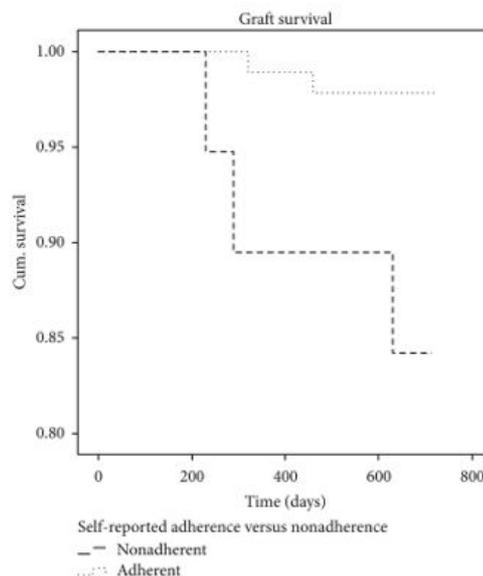


FIGURE 1: Kaplan-Meier Graft survival. The nonadherent group consisted of 19 patients (3 graft failures) and the adherent group consisted of 94 patients (2 graft failures).

2. 研究の目的

臓器移植前後のレシピエント・ドナーに性格検査・心理検査、QOL調査、半構造化面接を実施することでその特性や変化を明らかにし、レシピエント・ドナーのアドヒアランスに影響する要因について明らかにする。

3. 研究の方法

平成28年度の計画

【研究対象】

平成28年度に三重大学医学部附属病院で生体肝移植、生体腎移植を行うレシピエント・ドナー

【調査項目】

□性格検査・心理検査

(1) QOL調査(2): MMPI短縮版、POMS2、SF-36v2™(腎臓移植はKDQOL-SF™)を予定していたが、患者の負担や診療に使用する質問紙の継続性を考慮し、MMPI短縮版、は実施しなかった。POMS2はPOMSを用いた。QOLの評価は腎臓移植もSF-36v2™を用いた。

□記録内容:半構造化面接について表1にイン

術前インタビュー内容	術後インタビュー内容
<p>【レシピエント】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 臓器提供・移植の話が出た経緯</li> <li>② 臓器提供を巡る家族・家族間の話し合い</li> <li>③ 臓器提供の決断理由</li> <li>④ 臓器提供に対する不安・心配事、仕事について</li> <li>⑤ 移植がうまくいかない可能性について</li> <li>⑥ 提供・移植後に生じる変化について</li> <li>⑦ 家族関係について</li> <li>⑧ 自分・ドナーの性格、ストレスコーピング</li> </ul> <p>【ドナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 臓器提供・移植の話が出た経緯</li> <li>② 臓器提供を巡る家族・家族間の話し合い</li> <li>③ 臓器提供の決断理由</li> <li>④ 臓器提供に対する不安・心配事、仕事について</li> <li>⑤ 移植がうまくいかない可能性について</li> <li>⑥ 提供・移植後に生じる変化について</li> <li>⑦ 家族関係について</li> <li>⑧ 自分・レシピエントの性格、ストレスコーピング</li> </ul>	<p>【レシピエント】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 臓器移植について</li> <li>② 最近の体調について</li> <li>③ 薬剤について</li> <li>④ 食事について</li> <li>⑤ 臓器提供手術後の不安・心配事、仕事について</li> <li>⑥ 提供・移植後の変化について</li> <li>⑦ 臓器移植後の家族関係について</li> <li>⑧ ドナーの生活について</li> <li>⑨ ストレスコーピング</li> </ul> <p>【ドナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 臓器移植について</li> <li>② 最近の体調について</li> <li>③ 薬剤について</li> <li>④ 食事について</li> <li>⑤ 臓器提供手術後の不安・心配事、仕事について</li> <li>⑥ 提供・移植後の変化について</li> <li>⑦ 臓器移植後の家族関係について</li> <li>⑧ レシピエントの生活について</li> <li>⑨ ストレスコーピング</li> </ul>

表1. インタビュー内容

インタビュー内容を示す。コーディネーター記録、栄養士記録

□患者情報：性別、身長、体重、体温、血圧、脈拍、合併症、既往症、現病歴、前治療、アレルギーの有無、内服内容、家族情報、血液検査、尿検査、生理機能検査、病理組織所見、他科受診結果

上記について、術前、術直後（調査可能な時）、術後2カ月、術後6カ月に調査する予定であったが、患者の検査入院と合わせることで負担を少なくするため、術前、術後2カ月、術後6カ月、術後1年に実施した。

(1)性格検査・心理検査

POMS・・・過去1週間の「気分の状態」についての65の質問項目に答える質問紙法の検査であり、緊張・抑うつ・怒り・活気・疲労・混乱の6つの因子が同時に測定できる尺度である。性格傾向を評価するのではなく、その人のおかれた条件の下で変化する一時的な気分・感情を測定するテストである。

(2)QOL調査

SF-36v2<sup>TM</sup>・・・様々な疾患の患者や病気にかかっていない健康な方のQOLを測定する尺度である。信頼性・妥当性が保証された尺度（SF-36v2<sup>TM</sup>日本語版マニュアル）であり、生体臓器移植の評価における報告も多数存在する。

平成29、30年度の計画

平成28年度に行った調査と同様の調査項目について、術後1年、術後2年に調査する。各年度ごとに調査結果を整理し分析を行う。

平成31年度の計画

調査結果の分析、統合を行う。分析については以下の方法を用いて、多角的に実施する。なお、結果については国内外での学会発表を行うとともに、学会誌に論文を掲載する。

【分析方法】

性格検査・心理検査、QOL調査：検査値の推移を示す。また、臓器間、レシピエント・ドナー間、男女、年齢、血縁関係の有無、透析導入の有無について統計的に群間比較を行う。また、一般人との比較を行う。統計解析にはSPSS ver. 22.0を用い、有意水準は両側5%とする。要約統計量またはクロス集計表で集計する。分析には、判別分析・ロジスティック回帰分析・Fisher正確確率検定・カイニ乗検定・t検定・マンホイットニーU検定を使用する。

□記録内容：質的記述的研究を行う。半構造化面接については逐語録を作成する。逐語録、記録内容から心理的発言、アドヒアランス・QOLに関する発言や記録内容を抽出し、カテゴリーに分けて分析する。

□患者情報：【調査項目】の患者情報に基づき、属性を集計する。数値については推移を示す。

#### 4. 研究成果

##### (1)生体腎移植術前のレシピエント、ドナーの気分の検討

【目的】

生体腎移植術には侵襲が大きい治療であることに加え、健康なドナーに侵襲を加える必要があるという移植医療の特殊性が存在する。そのため、レシピエント、ドナー双方に対し、術前に精神的評価を行うことは術後の精神的反応を予想し、アドヒアランスの向上を目指す上で有効と考えられる。そこで、生体腎移植レシピエント、ドナーの気分、感情といった主観的側面の評価をすでに実施されている心理検査を分析し明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象は平成23年7月から平成26年12月までに三重大学病院において生体腎移植を施行したレシピエント、ドナーそれぞれ23名。生体腎移植術前に実施したPOMSの結果を用い検討した。下位尺度は緊張-不安、抑うつ-落ち込み、怒り-敵意、活気、疲労、混乱の6因子である。分析は、素得点をT得点に変換し、年齢、性別、ドナー-レシピエントの関係性（血縁、非血縁）での違いを検討した。年齢についてはレシピエント、ドナーそれぞれの中央値により2群に分け検討した。検定にはMann-Whitney U検定を用い、 $P < 0.05$ を統計的に有意差ありとした。

【結果】

レシピエントにおいては、年齢、性別、関係性のすべてで有意差は認められなかった。ドナーにおいては、性別では有意差は認められなかったが、年齢別の評価では60歳以上の群の方が60歳未満の群よりも活気以外の項目が有意に低値であり、関係性の評価では血縁の群の方が非血縁の群よりも活気の項目が有意に低値であった。

【考察】

今回の検討の結果、60歳未満のドナーにおいて移植前の気分にネガティブな感情が強い傾向があることが認められた。これは健常である身体から臓器を取り出すという生体移植術の特殊性が移植前の気分に影響を与えていたことが考えられる。更に60歳以上の群では、年齢的な成熟があることや、治療に社会的な調整を行う必要が少ないことで60歳未満の群よりも手術前の気分の安定が得られていることが考えられた。

##### (2)生体腎移植ドナーの術前心理状態と術後経過

本症例報告は、2011年7月～2014年12月までに三重大学医学部附属病院において生体腎移植

術を施行されたドナー23名のうち、術前心理評価において経過観察が必要とされた2症例について、術前・術後経過を振り返り、看護介入の示唆を得ることを目的とする。

症例1：ドナーは41歳男性、レシピエントは実弟36歳である。術前心理検査においてPOMSの緊張-不安、抑うつ-落ち込み、怒り-敵意の3項目が高値であった。患者背景として、兄弟が悪性リンパ腫で骨髄移植が予定されていたこと、ドナーには精神発達遅滞の幼い子どもがいること、ドナーの父親がドナーの腎提供に難色を示していた。

症例2：ドナーは53歳女性。レシピエントは息子26歳である。術前心理検査においてPOMSの抑うつ-落ち込みの1項目が高値であった。患者背景として、ドナーは右腎結石のため移植前に加療を要した。また、同世帯内に介護を要する家族が存在した。

腎提供までには、生活・治療背景等から生じる問題を克服するための段階があり、術前から術後にかけての継続的なフォローによって、ドナーは提供後の生活にも適応していくことができた。

### (3)腎移植後レシピエントの精神状態とQOL

【目的】腎移植がQOLに与える患者背景・身体・精神的要因を解析した。

【対象・方法】平成28年3月から8月までに三重大学附属病院を受診した腎移植後レシピエント(移植群)の、POMS(気分の評価)、SF-36v2(QOLの評価)による、質問紙法調査を実施した。QOLはStudent T-testを用い、Haysらが報告した透析中患者(透析群)のSF-36値と比較した。また重回帰分析により移植群QOLに關する患者背景・身体的・精神的要因を抽出した。P<0.05を有意とした。

【結果】69名中64名の回答を得た。移植群QOLは透析群より良好であり、高年齢と混乱は、身体的QOL低下に關与していた。一方、疲労が低く、活気が高いと精神的QOLは向上していた。

【考察】腎移植患者は透析患者よりもQOLが高く、QOLの向上も透析患者が腎移植を行う際の重要な目的となり得る。他の慢性疾患同様に、易疲労感・意欲等の気分要因がQOL向上に寄与しており、腎不全患者にとって、腎移植は身体的のみならず、心理・社会的にも根治的治療法に位置づけられる選択肢であると考えられた。

### (4)臓器移植における精神的側面に着目した文献的考察

[目的]本研究の目的は、臓器移植における精神的側面に着目した看護研究の現状を文献による考察から明らかにすることである。

[方法]1.対象文献:医学中央雑誌Web版を用い、臓器移植法が定められた1997年から2016年10月までに収録された和論文を対象に[臓器移植]のキーワードを入力し、絞り込み条件として、[原著論文]、[看護]を加えた。さらに、文献を熟読、研究者間で検討し、精神的側面に着目した文献を分析対象として選定した。

2.分析方法:マトリックス方式を用いて、著者、タイトル、研究デザイン、対象、移植の種類(臓器・方法)・時期・レシピエントとの関係性を整理した。さらに、目的、結果(明らかとなったこと、今後の課題)について精神的側面に着目しコード化し、内容の共通性に注目してカテゴリ化した。文献選定、分析過程において、文献の記述内容を忠実に読みとった。また、それぞれの過程において複数の研究者間で検討を行った。

[結果]検索された文献は292件であった。その中で、精神的側面に着目した文献は95件であった。文献を整理した結果、発表の時期は1997~2001年(24)、2002~2006年(31)、2007~2011年(16)、2012~2016年(24)であった。研究デザインは、事例研究方法(46)、続いて実態調査研究(24)であった。対象はレシピエント(53)、続いてドナー(22)であった。臓器別では腎臓(53)、続いて肝臓(29)であった。移植の方法として生体臓器移植(67)、続いて脳死・心停止後臓器移植(19)であった。時期は移植前が(18)、移植後が(35)、移植前後(42)、レシピエントとの関係性は親子間(40)、続いて夫婦間(17)であった(重複有)。研究の目的は、<対象者の現状把握>、<看護の現状把握>、<今後への発展>、明らかとなった結果は、<肯定的感情>、<複雑な感情>、<相互作用>、<対象を困む人々の理解>、<家族内力動>、<看護師の日常的ケア>、<看護師の効果的な関わり>、<看護師の関わりにおける問題>、<看護師を含むチーム連携>、今後の課題は、<ケアの継続>、<医療者の積極的介入>、<対象者の力を信じた関わり>、<個別性>、<体制の整備とチーム連携>、<社会への理解>のカテゴリが形成された。

[考察]精神的側面に着目した看護研究はどの年代においても行われており、対象者と接触時間の多い看護師は精神的側面に注目しながら看護を実践していた。また、看護師は多様性のある臓器移植看護において現状把握を行うことにより対象者が抱いている肯定的な感情ばかりでなく複雑な感情とも向き合い、日常的なケアを提供しつつ、より効果的な関わりを行うことや、対象の力を信じた関わりを行っていた。看護師は対象者のより良い経過や、看護の発展のために今後の課題について考えているが、個別性の高い精神的ケアにおいて具体化されていないものも多く、精神的ケアの難しさが明らかとなったため今後より具合的なケアとその効果を検証することが望まれる。

### (5)腎移植後レシピエントの個人属性と精神状態からみたQOLとの関連

【目的】腎移植がQOLに与える患者背景・身体・精神的要因を解析した。

【対象・方法】平成28年4月から平成29年3月までに三重大学附属病院を受診した腎移植後

レシピエント(移植群)の、HAD 尺度(抑うつ・不安の評価)、SF-36v2(QOL の評価)による、質問紙法調査を実施した。QOL は Student T-test を用い、Hays らが報告した透析中患者(透析群)の SF-36 値と比較した。また重回帰分析により移植群 QOL に関する患者背景・身体的・精神的要因を抽出した。P<0.05 を有意とした。

【結果】76 名中 73 名の回答を得た。移植群 QOL は透析群より良好であり、高年齢と抑うつは身体的 QOL、抑うつと不安は精神的 QOL の低下に関連していた。

【考察】腎移植患者は透析患者よりも QOL が高く、QOL の向上も透析患者が腎移植を行う際の重要な目的となり得る。抑うつ・不安の精神的要因が QOL 向上に寄与しており、腎不全患者にとって、腎移植は身体的のみならず、心理・社会的にも根治的治療法に位置づけられる選択肢であると考えられた。

#### (6)腎提供後ドナーの精神状態と QOL

【目的】腎提供後ドナーの QOL の特徴および提供後の QOL に影響を与える因子について検討すること。【対象・方法】平成 28 年 3 月から平成 29 年 3 月までに三重大学附属病院を受診した腎提供後ドナーの POMS (気分の評価) SF-36v2 (QOL の評価) による、質問紙法調査を実施した。1.SF-36 の 8 つの下位尺度の得点と、そこから得られる 3 つのコンポーネントスコア(身体的・精神的・役割/社会的健康度)について、公表されている日本国民標準値(2007 年度版)と比較した。2.重回帰分析により腎提供後ドナーにおける SF-36 のコンポーネントスコアに関する因子を患者背景・身体的要因および POMS スコアの中から抽出した。【結果】52 名中 46 名から回答を得た。1.腎提供後ドナーの QOL は下位尺度では全体的健康感、活力、心の健康、コンポーネントスコアでは、精神的健康度が国民標準値よりも有意に高値であった。2.重回帰分析の結果からは身体的 QOL には年齢が、精神的 QOL には POMS での緊張・不安が関連していた。【考察】腎提供後ドナーは国民標準よりも高値もしくは同等の QOL を得ることが示された。生体腎移植はドナーの健康な身体に侵襲を伴うものの、QOL の維持が保障されることも腎提供を行う際の重要な安心材料となり得ると考えられた。但し、本検討は横断的調査によるものであり、腎提供前後の QOL の経時変化については評価できていないため、更なる前向き調査を行っていく予定である。

#### (7)臓器移植における精神的側面に着目した看護介入に関する文献的考察

【目的】医学の発展とともに重症臓器不全の治療法の 1 つとして移植医療は注目されており、日本における移植の治療成績は飛躍的に改善している。臓器移植は多様であり、看護師の果たす役割は大きい。そこで、本研究の目的は、臓器移植における精神的側面に着目した看護介入の現状を明らかにするために文献より考察を行うことである。

【方法】1.対象文献：医学中央雑誌 Web 版を用い、臓器移植法が定められた 1997 年から 2016 年 10 月までに収録された和論文を対象に「臓器移植」のキーワードを入力し、絞り込み条件として、「原著論文」、「看護」を加えた。さらに、入手可能な文献を熟読し、研究者間で検討し、精神的側面に着目した看護介入に関する文献を分析対象として選定した。

2.分析方法：マトリックス方式を用いて、著者、タイトル、出版年、目的、対象、移植の種類(臓器・方法)・時期・レシピエントとの関係性、介入の方法と結果の項目に沿って整理した。

【結果】検索された文献は 292 件であった。その中で、精神的側面に着目した看護介入に関する文献は 9 件であった。発表の時期は 1997~2001 年は 1 件、2002~2006 年は 1 件、2007~2011 年は 4 件 2012~2016 年は 3 件であった。対象はレシピエント 9 件、家族 1 件であった。移植の種類として、臓器別では肝臓 1 件、腎臓 8 件、移植の方法として生体 6 件、明確な記載がないものが 4 件、時期は移植前 3 件、移植後 2 件、移植前後 4 件、レシピエントとの関係性は親子間 5 件、明確な記載がないものが 4 件であった(重複有)。介入の方法は、視覚的アプローチ(3 件)、専門職との連携(2 件)、オリエンテーションの実施(1 件)、患者参加型看護計画(1 件)、誕生日カードの配布と面談(1 件)、手作り新聞(1 件)であった。

【考察】精神的側面に着目した看護介入に関する文献は少ないものの近年増加傾向にあり、臓器移植看護への看護師の関心が高まっていることが考えられた。また、対象は主にレシピエントであり、医療者の注目は移植手術を行ったレシピエントに向く傾向にあることが明らかとなった。移植の種類としては生体腎移植が多く、実施症例数が多いことや準備期間があるため看護師の介入が行いやすいことが考えられた。介入の方法としては、患者の理解を促進したり、患者と協同するための介入が実施されており、治療への理解を得ると共に、これらの関りによって患者との信頼関係が深まり、患者の精神的安定につながっていたと考えられた。

今回臓器移植における精神的側面に着目した看護介入に関する文献は 9 件であったが、看護師はケアの一環として無意識のうちに様々な介入を実践している。今後はそれ以外の研究にも着目し、臓器移植における看護介入の現状を把握していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Toshiki H, Kouhei N, Yuko T, Tomoka O, Aiko U, Saori W, Shugo M, Motohiro O.	4. 巻 11(5)
2. 論文標題 Impacts of Interaction of Mental Condition and Quality of Life between Donors and Recipients at Decision-Making of Preemptive and Post-Dialysis Living-Donor Kidney Transplantation.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 J. Pers. Med.	6. 最初と最後の頁 414
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/jpm11050414	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Tamura, Aiko Urawa, Saori Watanabe, Toshiki Hasegawa, Toru Ogura, Kouhei Nishikawa, Yoshiki Sugimura, Teruhisa Komori, Motohiro Okada	4. 巻 50
2. 論文標題 Mood Status and Quality of Life in Kidney Recipients After Transplantation	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Transplantation Proceedings	6. 最初と最後の頁 2521 ~ 2525
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.transproceed.2018.03.077	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 田村 裕子、浦和 愛子、渡部 小央里、長谷川 智規、小椋 透、西川 晃平、杉村 芳樹、岡田 元宏
2. 発表標題 腎提供後ドナーの精神状態とQOL
3. 学会等名 第53回日本移植学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yuko Tamura, Aiko Urawa, Saori Watanabe, Toshiki Hasegawa, Toru Ogura, Kouhei Nishikawa, Yoshiki Sugimura, Teruhisa Komori, Motohiro Okada
2. 発表標題 Mood Status and Quality of Life in Kidney Transplant Recipients after Transplantation
3. 学会等名 15th Congress of the Asian Society of Transplantation (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田村 裕子、浦和 愛子、渡部 小央里、長谷川 智規、小椋 透、西川 晃平、杉村 芳樹、小森 照久、岡田 元宏
2. 発表標題 腎移植後レシピエントの個人属性と精神状態からみたQOLとの関連
3. 学会等名 第51回日本臨床腎移植学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田村 裕子
2. 発表標題 腎移植後レシピエントの精神状態とQOL
3. 学会等名 第50回日本臨床腎移植学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------